

経済理論の空間と時間

——「資本論」の批判的検討 <補論 1>

「資本論」第1巻第1篇第1・2章の文脈（再論）

Theoretical places and times of Marxian economic theory

—— Appendix(1) Reexamination of first two Chapters

前 原 芳 文
Maehara, Yoshifumi

ABSTRACT

This paper reexamines the contents of the first two chapters of Das Kapital in order to shed more light in particular on the theoretical rationalization of the “Form of Money” (Chapter 2). This reexamination is justified on the grounds that more accurate definitions of the concept of “Form of Value” or “Exchange Value” is crucial in understanding theoretical approach by Marx. The focus is thus made on the logical conditions underlying Sections 1 and 2 and their relationship with Section 3. The objective behind this analytical approach is to provide a clearer perspective on the theoretical content and context of these sections. It may also open avenues for further research leading to a better understanding of the broader relationship between the three initial Chapters and possibly of the whole of three volumes.

1. はじめに

これまで「資本論」の最初の二つの章について検討してきた。しかしそれによって第1章、第2章の「文脈」を十分に明らかにし得たなどとはとても言えない。第2章の初の部分における交換過程の諸矛盾とその止揚に関するマルク

スの議論の流れを筆者が正確には理解し得ていなかったことを見るだけでもそのことは明らかである。⁽¹⁾ 問題のマルクスの議論とは、第2章の最初部分すなわち「貨幣形態の理論的証明」がなされている部分である。前稿で筆者は「個人的過程としての商品交換と社会的過程としての商品交換との矛盾」の意味内容に拘泥するあまり、交換過程に内在する二つの矛盾から「初めの行為、あるいは神「業」——筆者）」による矛盾の止揚に至るこの箇所の文脈を十分には捉えることができず、また「神の業」そのものの内容も十分には理解されていなかった。

問題のマルクスの議論は第1章の議論、なかでも第3節「交換価値または価値形態」の叙述を踏まえたものである。したがって前稿における第2章に関する不十分な文脈理解は、第1章第3節「交換価値または価値形態」の内容が正確に理解されなかったことの結果でもある。だから第1章第3節についての理解が再検討され、必要なら訂正されなければならない。つまりこの補論の課題は第2章における貨幣形態の理論的論証及び第1章第3節の価値形態論に関してこれまで筆者が述べてきたことについて必要な修正をおこなうことにある。それによって「資本論」という理論体系の全体及び各部分を展開する際にマルクスが基礎とした理論的仮説 *theoretische Hypothese*（「経済学批判」の「序言」で *formulate* されている「*Leitfaden* 手引」）がどのようなものか、またこの理論的仮説に規定された論理展開の方法（一般的に用いられている話の運び方）がどのようなものであるかも明らかになろう。したがってこの作業は「資本論」第1巻の全体のみならず、全3巻を貫く文脈の理解にも大きな助けになるであろう。

さて、第1章第3節「交換価値または価値形態」についての筆者の不十分な理解は、いま少し視野を広げるなら、第1章全体の文脈が十分に捕捉されなかったために生じた結果でもある。この観点から前稿までに示した第1章の理解に

（1）拙稿『経済理論の空間と時間（2）』和歌山大学「経済理論」，第335号，pp.68-76.を参照。

ついて次の二つの欠陥があることを認めなければならない。すなわち第一に、同章第1節から第3節までの各節の相互関連が十分には明らかにされていない。そのことにも規定されて、第二に、同章第4節を構成する諸内容と第1節から第3節それぞれの内容との関連が十分には捕捉されていない。

一方、これらの欠陥を克服するための、したがって第1・2章の文脈をより正確に読みとるための手懸かりは確かにテキストに存在している。「資本論」初版・「序言」における第1章についての記述、及び第1章第4節「商品の偶像崇拜的性格」で使用されている「Produktionsverhältnisse 諸生産関係⁽²⁾」という術語がそれである。いずれも第1章第3節「価値形態または交換価値」の理解及び同節と他の節との関連のより正確な理解につながる確かな手懸かりである。

第2章までの文脈は第1篇の末尾をなす第3章の文脈にも連なっている。例えば第3章の「観念的」な貨幣存在の機能とされる Maßstab der Werte 諸価値の尺度（秤）についての議論は明らかに第2章における「商品を人格的に表現」する「商品所持人の意志・意識・感覚」の規定を踏まえた叙述である。前稿で筆者は、テキスト第2章冒頭部で提示される「商品所持人」について、マルクスはその意識あるいは意志をブルジョワ社会の「上部構造」に帰属させていると記した。そのような「商品所持人」の「意志」あるいは「意識」に関する定義は、「諸価値の尺度（秤）」という機能を果たす貨幣を「上部構造」に帰属させることにも通ずる。言い換えれば、第3章の文脈を読みとる際には、同章のもつ重層的構造に留意すべきなのである。

また上述のような第2章で規定されている「商品所持人」の「意識」は、直接には商品など「歴史的」な労働生産物の諸形態（の諸内容）とそれらをつく

(2) Siehe S.90, “Derartige Formen bilden eben die Kategorien der bürgerlichen Ökonomie. Es sind gesellschaftlich gültige, also objektive Gedankenformen für die **Produktionsverhältnisse** dieser historisch bestimmten gesellschaftlichen Produktionsweise, der Warenproduktion”.

る労働の諸形態（の諸内容）との関係、すなわち一つの生産関係が当事者たちの意識にどのように反映しているかに関する第1章第4節における分析・諸規定をも踏まえて提示されている。同節におけるそのような商品所持人の「意識」の分析はさらに、同章第3節価値形態論に集約されている商品とそれを生み出す労働との関係、つまり資本家的生産様式が支配的な社会における最も抽象的かつ一般的な生産関係＝下部構造の分析、すなわち商品形態と労働形態との関係の解明に基づいているものと考えられるのである。⁽³⁾

第3章の「諸価値の尺度」についての上述のような理解の正否をはっきりさせるためにも、第1章が然るべき内容をもっていることの確認が必要である。そこで第3章の検討に入る前に、「経済理論の空間と時間」という本来の視角を一旦棚上げにして、マルクスが「資本論」を執筆するにあたって「手引」としたとみられる理論的仮説⁽⁴⁾に極力配慮しながら第1章及び第2章の内容についてより詳細な検討を加える次第である。それによって少なくとも「資本論」第3巻第3篇「利潤率の傾向的低下の法則」⁽⁵⁾に至る「資本論」の構成も明らかになるであろう。

(3) 前稿と前々稿で筆者は、商品が主体となって形成される商品の交換関係という「理論的な場」において商品形態が定義されている第1章に対して、第2章でその意志や感覚等々として実現する商品所持人が主体として関与する商品の「交換過程」という理論的な場において貨幣形態が定義されているとの理解を示した。また第1章第4節は続く第2章において「商品所持人」を登場させるための「踏み段」となっているとも述べた。このうち「商品が主体となって形成される商品の交換関係という『理論的な場』において商品形態が定義されている第1章」との理解は必ずしも間違いではないが、単なる表象である交換関係あるいは感性的に認識されただけの交換関係を指して使用されている場合と、商品の交換関係＝商品の価値関係という表象であると同時に理論的な意味で使用される場合とが区別されていないという問題を孕んでいた。本論ではこれら二つの「交換関係」の差異に配慮してテキストの文脈を追跡することにした。

(4) マルクスが「経済学批判」「序言」のなかで、ブルジョワ社会を分析する際の「Leitfaden 手引」として述べている一種の理論的仮説 theoretische Hypothese のことである。この仮説を下絵とし、その上に経済理論 Theorie über Politichen Ökonomie として「資本論」は築かれている。

2. 『資本論』初版「序言」及び「経済学批判」の序言」と「資本論」

第1章との関連

—— 生産様式、諸生産関係及び諸所有関係、労働の生産力

2-1. 『資本論』初版「序言」と第1章との関連

『資本論』初版の「序言」冒頭の四つのパラグラフにある以下の章句を見れば、第1章が商品形態論として書かれており、したがって第3節にある価値形態論が同章の中心をなしていることは明らかである；

「その第1巻を出版するこの作品は1959年に公刊された私の著述、『経済学批

↙(5) この表題をそのまま飲み込んではいならない。 $p' = m/(c+v) = (m/v)/(c/v+1)$ という関数的関係からして明らかに利潤率は「剰余価値率」と「資本の有機的構成」（一種の資本装備率、 c は一定期間における建屋・機械等固定資本の償却費と原料・補助材料費の合計額、 v は同じ期間における労賃総額）によって規定される。後にもみるようにマルクスは「資本論」第1巻第3篇において相対的剰余価値論として労働生産力の上昇による剰余価値率の上昇を資本家的生産様式の趨勢あるいは一般的傾向として論じている。一方さらに後の第3巻第3篇では剰余価値率を一定と仮定して、資本の有機的構成の高度化が利潤率の低下を導いている。マルクスの本意は、利潤率がどのように推移するかはそれを規定する二つの変数に依存する、というものである。つまり利潤率は、一方では、労働生産力の増強により増大する相対的剰余価値によって上昇する傾向をもつが、他方ではその必要条件である剰余価値の資本としての再投下すなわち資本蓄積に伴う資本の有機的構成の高度化により抑制されるのである。このように労働生産力の変化は利潤率に対していわば矛盾的に作用する可能性をもつから、利潤率の趨勢によって「支配的生産様式の変化如何」を捉えようとする場合、その趨勢がいずれの要因にどの程度支配されているのか見極めねばならないというものであろう。

マルクスは利潤率の趨勢を「生産力と諸生産関係及び諸所有関係との矛盾的関係」の数量的指標とし、また資本家的生産様式とそれに対抗する生産様式との対抗関係を併せて見極めることによって、「社会変革の時期」であるか否かを判断しようとしていたのではないかと筆者は推測する。「資本論」を含む政治経済学体系研究によってマルクスが果たそうとした「実践的な課題」として、利潤率の趨勢とその理論的根拠の解明、また資本家的生産様式に対抗しそれに置き換わる可能性を有する諸対抗的生産様式を分析することを挙げなければならないであろう。その点に配慮して「前半体系」と「後半体系」からなるマルクス政治経済学体系の再構築が図られるべきであろう。つまり利潤率は、資本家的生産様式に対抗する新たな諸生産様式の探求とともに後半体系においてもキーワードなのである。

そのような視角からすると、「前半体系」の再構築においても、すなわち第3巻第4及び5篇の商人資本や貨幣取り扱い資本、利子及び資本家的信用が、またその上に地代あるいは資本家的土地所有までもが組込まれた資本家的生産様式の理論の段階においても、資本家的生産様式の「歴史性」を計るこの数量的指標＝利潤率の趨勢をより具体化された形式において表わす必要があろう。



判』の続編である。」「前作の内容はこの巻の第1篇に要約されている。」「どんな学問でも難しいのはそのはじめの部分である。商品分析がおこなわれている第1章、したがって第1篇を理解するのは難しいであろう。価値実体と価値量の分析についてはできる限り平易な表現に改めた。価値形態——その最終的な姿が貨幣形態である——の中身はひどく空疎で単純である。だがそれを究明するのに人間精神は2000年にも亘って虚しい努力を続けてきたのである。他面ではその間に、内容豊富で複雑なその諸形態の分析については少なくともほぼ成功したのである。なぜか？ 成長の完了した植物体を研究の方が植物体細胞を研究するよりも容易だからである。そのうえ経済的な諸形態の分析に当たって

✓ ただし現実には、例えば現行第5篇第25章以降の諸章を一瞥すればわかるように資本家的信用の理論はマルクスによつては完成されていない。そしてそのため資本論全3巻全体を貫く基本的な文脈も不鮮明で、第3巻全体における第3巻第3篇の位置づけも不透明なものになってしまっている。このような分かり難さから「資本論」体系、特に第3巻を救い出すについては、ある一つの方途があると筆者は考えているのだが、それについて詳しくは別な機会にそれだけをテーマとして論ずることにする。ただここでは備忘のためにそこで考察されるべき事柄として三点だけを記しておこう。第一に、第3巻「資本家的生産の総過程」；**“Der Gesamtprozeß der kapitalischen Produktion”**をどのような文脈で捉えるべきかという問題がある。そしてこれについては2つの可能性が考えられる。一つは第2巻第3篇を価値論レベルの資本家的生産の総合：**“die kapitalische Produktionsweise an und für sich”**（それに対応する**“die kapitalische Produktionsweise an sich”**は第1巻第2篇から同巻末尾まで、同じく**“die kapitalische Produktionsweise für sich”**は第2巻第1・2篇）と見て、第3巻の全体をその生産価格レベルでの具体化というように捉える立場である。なお、この場合には第1巻第2篇以降のテキスト全体が第1巻第1篇の具体化と理解されることになる。なお第1巻第2編以降で展開されている資本の生産過程は、相対的剰余価値の生産、資本蓄積（拡大再生産）、資本による労働の包摂を本質とするダイナミックな過程である。

これとは別に、第1巻第2篇から同巻末尾までを資本家的生産の an sich, 第2巻全体をその für sich である資本の流通過程論と見立てて、第3巻を資本家的生産様式の総合 **“die kapitalische Produktionsweise an und für sich”** と見なすという考え方が考えられよう。この第二の可能性は、第2巻全体を第1巻第2篇から同巻末尾までの **“die kapitalische Produktionsweise an sich”**, に対応する **“die kapitalische Produktionsweise für sich”**, そして第3巻全体を資本家的生産の **“die kapitalische Produktionsweise an und für sich”** と捉える見方である。この場合には第3巻と第1巻第2篇～第2巻第3篇の関係は後者の第1巻第1篇との関係と同様のものと理解されよう。筆者はこの第二の可能性に傾いている。

また第3巻第4及び第5篇は相互に依存し合っている一まとまりのものとして捉える視角が必要であろう。商品取り扱い資本も貨幣取り扱い資本も現実には商業信用・貨幣信用なし ➤

は顕微鏡も chemische Reagentien 化学実験装置も使うことはできない。抽象力がこの二つの代わりをしなければならない。ブルジョワ社会で細胞形態に相当するのが労働生産物の商品形態あるいは商品の価値形態である。無学な者の眼には、ブルジョワ社会の分析はつまらない細々とした物事のあいだを行ったり来たりすることのように映る。確かに細々したことを取り扱うのだが、それは解剖学が細々した物を取り扱うのと同じなのである。」(S. 11-12. を参照。引用文中の傍点は筆者による。)

第1章で説かれるべき主たる内容が第3節「交換価値または価値形態」にあるとするなら、次には、第3節に対して第1節と2節とはいかなる関連をもって

↙ には産業資本に対し自立的に存在することはあり得ない。また現実の貨幣信用も商業信用も利子(率)の存在を前提する。他方では資本家的生産の現実において最も基本的な貨幣信用を構成する銀行信用は、一方では自己宛債務を利付きの条件で貨幣として貸し付け、他方ではそれを(他行宛債務とともに)預金としても受け入れるという形態で実現されていることからわかるように、商業貨幣の存在をしたがって商業信用の存在を前提する。このような商品取り扱い資本・貨幣取り扱い資本、利子、商業信用、貨幣信用のあいだの相互的関連を考えるだけでもこの視角は首肯されよう。

これまで筆者は、第3巻を剰余価値＝利潤のさまざまな配分諸形態が記述されている巻ではないかと考えてきたのであるが、その立場は放棄する。また第2巻は、第1巻で記述される資本的生産様式の根幹をなす資本の生産過程そのものが、その本質をもって存在するための「歴史的」必要条件が資本の流通過程について規定されている巻として捉える視角からその文脈を追跡するであろう。

マルクスが「経済学批判」の「序言」において定式化した「手引」に依拠して労働生産力と生産諸関係及び所有諸関係との矛盾的な関係に注目して資本論体系を展望すると、以上のように第2巻は「資本の生産過程の歴史的必要条件」、また第3巻は資本の数量的には剰余価値率・利潤率の概念を中軸に据えてその再構築を図るという方針が考えられよう。またそうすることによってこそ「前半体系」の「後半体系」への接合、「後半体系」の理論的具體化についての展望が拓かれるものと確信する。

本論では第1章が次のように編成されていることが証明されるであろう：商品の an sich な定義が与えられている第1節、商品が商品として在るためのそれをつくる労働の歴史的属性が、したがって商品が für sich に定義されている第2節、商品及びそれをつくる労働についての認識が総合されて、商品とそれをつくる労働の「歴史的」本質が an und für sich に価値形態論として定義されている第3節。この注はこれから証明されることを前提して記述されているからその主旨は解りづらいかも知れない。しかし、「資本論」全三巻を一度でも読み通された読者であれば、本論を読まれた後にはこの注で記述されている事柄を必ず理解されるはずである。

いるのか、また一見内容的には重複しているかにも見える第1節と第2節とはなぜ節を分けて記述されなければならなかったのか、という疑問が生ずる。

ところで、前述のようにこれら三つの節相互の関連を捉えるためのもう一つのヒントは前述の同章第4節にある「Produktionsverhältnisse 諸生産関係」である。第1章・第4節、例の孤島暮らしをするロビンソンの生活の物質的生産様式等さまざまな生産様式を基礎とする諸社会——ただし歴史的には不連続な諸社会——における労働の諸性質と労働生産物の諸性質、あるいはさまざまな労働の諸形態と労働生産物の諸形態、及びそれらの関連が論じられている箇所にそれはある。

そしてこの「諸生産関係」という語は「経済学批判」「序言」にある「Leitfaden 手引」が説明されているパラグラフでも用いられている。そこにおいてそれは「Produktionsweise 生産様式」の内容を規定する重要な概念である。このことは第1節「商品の二要因 使用価値と価値（価値実体 価値量）」と第2節「商品で表わされる労働の二重性」では、商品形態とそれに対象化される労働の形態とが一つの生産関係を構成する二つの契機として、したがって一つの生産関係が労働生産物の形態→労働の形態の順に論じられているのではないかという考えにわれわれを誘う。

ところが第3節の表題は「価値形態または交換価値」である。そこではその自然形態とともに商品という労働生産物形態の内的要素を構成する価値形態が論じられている。つまり第1節と第2節では、商品形態の規定は完了していないのである。そうだとすれば、第1節と第2節では生産物の形態とともに生産関係の内容をなす労働形態の規定も完了してはいないと考えるのが自然であろうし、第2節が労働形態論である（そのことに対応して第1節は商品形態論である）とする見方も否定されなければなるまい。

では第1節及び第2節それぞれの内容または両節の関連はどのようなものと捉えるべきなのであろうか？ さらにそれら2つの節と第3節とはどのような

関係にあるものと考えべきなのだろうか。

さしあたり次のことは明らかである：第1節と第2節においてはそれぞれ「商品」概念、「商品で表現されている労働」概念が——未完成なものであるとはいえ——規定されている。

そう言うのは、両節においては「商品」、「その二重の性格が商品で表現されている労働」それぞれの諸属性が確かに規定されており、その限りでは「商品」及び「商品で表わされている労働」が概念として定義されているからである。⁽⁶⁾

2-2 「経済学批判」の序言」と「資本論」第1章との関連

「資本論」第1巻第1篇は「経済学批判」の「要約」版であるから、第1章で展開されている商品形態論もマルクスの人間社会についての根本的な仮説を「下敷き」として書かれていると考えることができる。この仮説とは「経済学批判」の「序言」において彼が近代市民社会を研究するための「Leitfaden 手引（または下敷き、現代風に翻訳すれば manual マニュアル——筆者）」と呼んで定式化しているものである。この「手引」すなわち理論的仮説において重要な位

(6) なお同章第4節の叙述に見られるように、価値形態したがって商品形態を解明することはマルクスにとっては古典派経済学の代表者・リカードオの商品認識に対する批判、その意味で「政治経済学批判」でもあった。マルクスによるそこでのリカードオ批判の予先は、リカードオが商品を自然な、永遠に持続する労働生産物の形態と捉える点にむけられている。そのためにリカードオは商品で表現されている労働がもつ二つの性質を区別して捉えることなく、また労働の二性質と商品がもつ二性質（使用価値と価値）との関連、したがって商品の価値と価値の実体をなす労働との関連を見逃し、それゆえに価値量の規定にも失敗したのだ、そうマルクスはリカードオを批判するのである。第1章の第1節から第3節までの諸内容も第4節に至る古典派＝リカードオ「経済学批判」の文脈においてみることができる。そのことが以下の考察によって明らかになる。

マルクスは、第1章全体の叙述を通じて、商品を労働生産物の資本家的生産様式が優勢な社会における「歴史的」形態であるという彼自身の「仮説」に基づいて「商品形態は何であるか」を理論的に証明しようとする。この「仮説」を政治経済学的に証明するために第1章は書かれたものと考えられるのである。ただし、次に詳しく述べるように、「歴史的」という語はいわゆる物事が互いに因果となりながら継起的に生ずるという意味ではなく、むしろ「物事は特定の諸条件のもとでのみ、しかも他者との特定の関係において特定の諸条件が備わっている場合にのみ、存在しうる」という意味で用いられている。

置を与えられているのが「Produktionsverhältnisse 諸生産関係」という概念である。「手引」では生産様式、経済構造、諸生産関係とその一つである生産関係を構成する労働の形態と労働生産物の形態という二つの契機、及び労働生産力の変化について概略次のように捉えられている。

この「手引」を用いてマルクスが考察しようとする対象の全体はブルジョワ社会を含む「歴史的」社会である。彼はこの社会全体を二つの契機に大別して捉えようとする。一つはこの社会の生産様式すなわち経済構造であり、他方は法制度や政治制度や慣習、哲学等々社会のイデオロギー的構造である。これら二つの構造のうち社会の「生産様式」すなわち「経済構造」の内容が社会全体の性格を規定するものと見なされている。社会の「本当の基礎」をなす生産様式が社会のもう一方の契機をなすイデオロギー的な諸構造の内容を規定する、とマルクスはいうのである。前者が「下部構造」、後者が「上部構造」と呼び慣わされているものである。

さらに「手引」では生産様式そのものの性格は「諸生産関係」により規定される、とされている。「諸生産関係」とは、これまで検討したテキストの部分に限って言えば、例えば第1章第4節で論じられていたロビンソン・クルーソーの孤島における生活の物質的生産における彼の労働とその生産物との関係や中世社会等々の物的生産に観察される特定の諸性質をもつ労働と同じく特定の諸性質をもつその生産物との関係、すなわちそれぞれの社会の生産様式を規定する労働の形態とその生産物の形態との関係である。もっと具体的に言うなら、たとえば欧州中世社会における農奴のおこなう労働形態・賦役と領主が受け取る生産物形態・年貢との関係である。

つまりそれぞれの生産様式の性格は特殊な諸生産関係によって規定され、さらに諸生産関係の内容はそれら諸生産関係を構成する最も基本的な生産関係、例えば、労働形態と労働生産物形態によって規定される、というわけである。

諸生産関係は諸所有関係とともに当該社会の「諸生産力 Produktionskräfte」

（「全種類の有用労働の生産力」の意——テキスト第1章第2節参照。）と矛盾的關係にあるとマルクスは言う。すなわち一つの社会を規定する諸生産關係は、諸生産力が發展する時期においては諸生産力發展の諸形態として現われるが、諸生産力の發展が一定の段階に達すると諸生産力の發展に対する桎梏に転化するというのである。そしてこのような諸生産關係及び諸所有關係と諸生産力との關係が社会の構造全体の変化すなわち社会変革をも基礎づけるものだといなされている。

またマルクスによれば、一つの「歴史的」な人間社会は社会変革の時期を経て新たな支配的生產様式に基礎を置く新しい社会に転化する。そしてこの新しい生產様式はすでに旧い社会のなかで非支配的な生產様式として發展するものである。だから変革の時期にある社会がどのような社会であるかは、その基礎にある上述の諸生産關係と諸生産力との矛盾的關係だけによって説明されるものではなく、旧い生產様式と新しい生產様式（したがって旧い生産關係と新しい生産關係）との対立關係によっても説明すべき事柄だということになる。

つまり彼によれば、いかなる社会もその基礎にはいわば二重の動因——諸生産力とその社会で優勢な諸生産關係及び諸所有關係との矛盾的關係、及び優勢な生產様式とそれとは別な生產様式との對抗關係が横たわっているということになる。言い換えれば、いずれの社会もそのうちに支配的生產様式（したがって諸生産關係）が別な支配的生產様式に転化するというダイナミズムを含む不安定な、その意味で「歴史的」な社会と見なされているのである。⁽⁷⁾

＜資料：「経済学批判」「序言」、問題のパラグラフ＞

「私につきまとった疑念を解くため最初に企てられたのは、Hegelの法の哲学を批判的に検討する仕事であって、その序文は1844年にパリで出版された『独仏年誌』で発表された。私の研究は、国家諸形態のような法的諸關係は aus sich selbst その内容がどうであるかによって理解すべきでも、いわゆる人間精神の一般的な發展に照らして理解すべきでもなく、むしろ

Hegel がそれらの全体を 18 世紀におけるイングランドとフランスの歴史を参考に『ブルジョワの社会』と呼んで総括した諸生活関係に根ざしているものであり、それゆえブルジョワ社会の解剖は政治経済学に求めるべきである、という結論に至った。Guizot 氏の国外追放命令によって移動させられた Brüssel でもパリで始めたこの研究を継続した。私の頭のなかに思い浮かび、そしてそのうちに確実なもの、研究ための Leitfaden 手引となった一般的な結論は、それを取りまとめると以下のように定式化できる：In der gesellschaftlichen Produktion ihres Lebens gehen die Menschen bestimmte, notwendige, von ihrem Willen unabhängige Verhältnisse ein, Produktionsverhältnisse, die einer bestimmten Entwicklungsstufe ihrer materiellen Produktivkräfte entsprechen. その生活の社会的な生産において人間は一定の、必然的な、その意志からは独立した諸関係、すなわち諸生産

↙(7) ちなみに三浦和男氏は、その訳書「精神の現象学序論——学問的認識について G.W.F. ヘーゲル」(1995 年、未知谷)の「訳者まえがき」のなかで次のように述べられておられる。「ヘーゲルの体系は目的論的に作られているんですね。例えば『論理の学問』でも『エンサイクロペディア』のなかでも、全体というものを Totalität として、全体を円周とするようなトータリテートとして捉えている。ふつう僕たちは、あるものがあるものとして、その構造的にある性質が内在してあるというふうに、捉えますよね。例えば鉄が、ある特定の性質を自分のなかに備えていると考える。ある一定の比重をもっていたり、ある硬度、硬さを持っているとか、何度になったら溶けるとか、というふうに特定の性質を内に含んだ構造的な安定した全体として考えている。これは近代の人の考え方です。

これに対してヘーゲルは、ある人間の性質であれ物質の性質であれ、そういう性質を個体に内在している固有の性質とは見ないで、そのものが置かれた関係のなかで決定された、あるいは限定された性質として捉えます。……(中略)……

こういう考え方に基づいてヘーゲルは自然界の事物をも見ていく。例えば鉄なら鉄という金属が独特の鉄としてあり得る、一定の環境がなかったらとてもできないわけですね。ある特定の状況の下で、例えば鉄のこの形が保っていられるんであって、そういう性質がそういう性質として現われるのは相対的なある関係のなかかなのです。そういうふうな関係のなかで、あるいは、ある全体的なコンテキストの一部にある特定の個体ができてくる。そうしてこういう個体は相対的には隔離された「一状態」として安定した状態でいられるという関係のなかで初めてそういう状態を維持できる。だから、特定の個体を特定の個体たらしめるような関係の総体があるということなのです。」(同書、62-63 頁。傍点は筆者による。)三浦氏によるこの叙述により筆者はマルクスの「歴史的」という語を本文のように解釈するきっかけを与えられた。また、「an sich», „für sich”, „an und für sich” の差異と関連については、同書 80 頁以下の記述を参照。

関係のなかに入る。これら諸生産関係は人間の物質的な諸生産力の一定の発展段階に対応している。これらの諸生産関係の全体は、社会の経済的構造をなしている。すなわちその上に法的及び政治的な *Überbau* 上屋が立ち上がり、そしてこの上屋には一定の社会的な諸意識形態が対応している。物質的な生活の生産様式が社会的、政治的及び精神的生活過程一般を規定する。人間の意識が人間の存在を規定するのではなく、逆に人間の社会的存在がその意識を規定するのである。社会の物質的な諸生産力がある発展段階に達すると、それらはそのときに存在する諸生産関係と矛盾するに至る、または、将にそのことの法的な表現なのだが、諸生産力がそれまでそのなかで運動してきた諸所有関係と矛盾するに至る。これらの諸生産関係及び諸所有関係は諸生産力の発展諸形態から諸生産力に対する桎梏へと急変する。そのとき社会的な革命の時期が始まる。経済的な基盤が変化するのに伴って巨大な上屋全体がゆっくりとあるいは急速にひっくり返るのである。そのような変革の考察においては常に、経済的な諸生産条件、自然科学の法則に忠実に持続する経済的な生産諸条件の変化と法的、政治的、宗教的、慣習的、あるいは哲学的な諸形態、つまりはイデオロギー的諸形態——人がこの衝突を知覚するようになるのはこのイデオロギー的諸形態にくるまれのことであり、また徹底的な議論を交わすのもこのイデオロギー的諸形態についてである——とが区別されなければならない。……」(Karl Marx , “Zur Kritik der Politischen Ökonomie”, http://www_ml-werke_de/me/me13/me13_007.htm 翻訳は筆者による。特に下線部に注意されたい。)

「資本論」第1巻第1篇はマルクス自身が記しているように「経済学批判」の「要約」版である。だからこの第1篇も「経済学批判」の「序言」で定式化された「手引」に依拠して、すなわち社会の生産様式、諸生産関係、諸生産関係を構成する諸契機の「歴史的」性格、諸生産関係及び諸所有関係と諸生産力との矛

盾の関係から構成される「歴史的」社会を分析するための「仮説」を下敷きにして叙述されているものと考えられる。そのことに留意しつつ、同章第1節から第3節に至る話の流れを追うことにしよう。

3. 第1章第1節から第3節に至る各節の内容と関連

第1節 商品の二要因 使用価値と価値（価値実体 価値量）

第1章第1節の冒頭部分では、資本家的生産様式が優勢な社会では富は商品の塊として現われ、また個々の商品は富の「elementare Form 元素的形態」を構成している、だから、商品の分析から「われわれの研究」を始めるのだ、そうマルクスは言う。ここで「元素的形態」という elementar の名詞形 Element は、古代ギリシャのソフィストたち以降の西欧哲学の用語法に従うなら、ある物事の本質を意味する語であるから、ここでは資本家的生産様式にとって本質的な形態または同生産様式の本質を表わす形態という意味において理解すべきである。資本家的生産様式の本質を表わしている商品という形態が何であるかを明らかにすること、それが当初の課題なのだというのが冒頭のパラグラフの主旨である。それに続いて第1節では概略次のような議論がなされている。

① 表象としての商品を構成する2要因（使用価値と交換価値）

（さしあたり諸商品が存在する市場が表象されている。⁽⁸⁾そこにおいて）商品は使用価値であり同時に交換価値として現われている。物体としての商品はさまざまな人間の欲求を消費手段あるいは生産手段として充足する。商品の使用価値とはこれら諸商品がもつ有用性であり、そしてそれぞれの商品の有用性は具体的有用労働によって生み出されている。また交換価値とはある商品の別な種類の商品に対する交換比率のことであって、交換関係のなかでは商品の使用価値とは無関係な性質として現われている。

② 商品の使用価値はそれが交換価値として交換された後に実現される。その

意味で商品の使用価値はその交換価値の担い手である。諸商品の交換関係は使用価値の捨象により特徴づけられる。そこで交換関係のなかにある諸商品にそれらの使用価値を捨象するという理論的操作を加えると、諸商品は共通に「無差別な人間労働」の凝固物として現われる。

ある物が商品として市場に登場するためには使用価値という性質が欠かせない。だがこの性質は、商品が交換価値として交換された後に初めて実現される性質である。だから商品の使用価値は交換価値を担う素材 Träger であるという関係にある。ところが交換関係は諸商品の使用価値の捨象によって特徴づけられている。なぜならそれぞれ特殊な使用価値である諸商品がそれら自身とは異なる使用価値をもつ他の諸商品と等置される関係こそ交換関係だからである。そこで諸商品から使用価値を捨象してみると、その後それぞれの商品体に残るのは無差別な人間労働のゼリー（凝固物）という共通の性質である。なぜなら諸商品の使用価値を捨象するということは、諸商品を生産する諸労働からそれらの使用価値を産み出す労働の具体的な諸性質を捨象し、無差別な人間労働に還元することに他ならないからである。

- ✓ (8) 無数の商品の交換関係は次のように想い描くことができよう。まず正 n 角形を想定されたい。 n は「無数」に存在する諸商品にふさわしく限りなく無限・ ∞ に近い数である。だからこの正 n 角形は実は真円に限りなく近いのである。そしてそれぞれの角は諸商品それぞれの使用価値が有する特殊性を象徴している。あるいはそれぞれの角の上にそれぞれ特殊な使用価値を有する諸商品が存在するのである。これら無限に近い数の諸商品が交換される関係が「交換関係」の全体である。これらの諸商品のなかから一つだけを選び出すと、この商品はそれ自身と使用価値を異にする無数の諸商品と交換されているのが現実である。だから一商品の交換関係の全体は先の正 n 角形の一つの角から、全ての他の角に向かって引かれている無数の直線で表現され、全商品の交換関係の全体は、それぞれの角から全ての他の角に向かって引かれている無数の直線で表現されよう。

ことのついでに、この図を用いてもっと後で登場する「あらゆる種類の使用価値」あらゆる使用価値をつくるあらゆる種類の有用労働について考えると次のことが容易に推測されよう：諸商品の諸使用価値の差異、また諸労働の有用性の差異は、その数が増えれば増えるほど、差異として意味をなさなくなる。いいかえれば、具体的有用労働の全てはますます社会的総労働に質的に等しくなる。なぜなら、上の正 n 角形についてみると、 n が ∞ に近づけばそれだけ、この正 n 角形は真円に近づくからである。

- ③ 商品価値の実体はそれに凝固している「単なる人間労働」である。だから商品の価値量はそれに凝固している「単なる人間労働」の大きさによって規制される。また「単なる人間労働」の大きさは労働の継続時間によって規定される。

こうして諸商品の交換関係または諸商品の諸交換価値の背後にあるのは、単なる人間労働の結晶という諸商品に共通な性質、すなわち価値としての諸商品の同一性である。したがって諸商品の価値の大きさが価値を形成する実体の量すなわちそれぞれの商品に凝固している労働の大きさにより規制されることも明らかである。この労働の大きさそのものは労働の継続時間によって測られる。ただし怠惰や未熟さの故に追加される労働時間部分は価値を形成する労働の継続時間としてはカウントされない。

- ④ 諸商品の諸価値として現われる全ての労働力は社会的総労働力を構成する諸部分であるから、商品価値の形成においては社会的平均労働力として作用する。したがって個々の商品の価値量を規定するのは各商品の生産に「社会的に必要な労働時間」すなわち社会の正常な生産諸条件、平均的な労働強度と熟練度とをもってそれぞれの商品をつくるために必要な労働の継続時間である。

商品世界の諸価値として現われる社会の総労働力は、無数の個々の労働力から構成されているが、それらの労働力はそこでは同じ人間労働力とみなされる。そしてこれら個々の労働力は社会的平均労働力という性格を帯びて作用し、したがって一商品の生産においても平均的に必要な労働時間を必要とする範囲で他の労働力と同じ人間労働力であると認められる。つまり個々の商品の価値量を規制するのは「社会的に必要な労働時間」、すなわち社会の正常な生産諸条件、平均的な労働強度と熟練度とをもってそれぞれの商品をつくるために必要な労働の継続時間なのである。

- ⑤ 労働生産力の変化とともに商品の価値量は変動する。労働生産力を規定するのは労働者の技能の平均度、科学の発展度及び科学が技術に応用されている度合い、生産過程が社会的結合、生産手段の規模と作用能力、自然事情などの諸要因である。

ある商品を生産するのに必要な労働時間は労働の生産力が変化するとともに変動する。そしてそれにつれて当該商品の価値量も変動する。労働の生産力は労働者の技能の平均度、科学の発展度及び科学が技術に応用されている度合い、生産過程が社会的結合、生産手段の規模と作用能力、自然事情などにより規定される。

- ⑥ 使用価値ではあるが労働の生産物でなくしたがって価値ではない物も存在する。他方では自家消費される有用労働の生産物のように、商品ではないが使用価値ではある物も存在する。

最後に、価値ではないが使用価値ではあるという物も存在する。人間に効用をもたらすのだが、その効用が労働によって媒介されてはいない物がそうである。また商品ではないが有用な人間労働の生産物である物も存在する。自分の労働の生産物を自家消費する人は、使用価値はつくるが商品につくらない。彼は他人のための使用価値、社会的使用価値を生産してはいないからである。

以上が第1節の諸内容である。みられるように第1節では商品を構成する使用価値という性格と価値という性格、商品の使用価値はその価値の担い手 (Träger) であるという両属性相互の関連、価値の実体である「同じ人間労働」と商品の価値量、そして使用価値量及び価値量と社会的平均労働力及び労働の生産力との関連が規定されている。商品が an sich に分析され、不完全ながら概念として規定されていることが確認できよう。

だから、これまでのところでは商品がどのような意味で歴史的であるのか、あるいは商品という歴史的な存在を可能としているものが何であるのかは明らかに

されていないのである。その点を商品それ自体の分析によってではなく、商品に対し外的な存在である労働との関連において解明しようとするのが第2節なのではないか、と予想される。第1節においては商品を構成する2要因（使用価値と価値）の内容はそれらをつくる労働がもっている二つの性格（具体的有用労働と抽象的人間労働）によって規定されていることが明らかにされた。すなわち商品の内容を規定する外的契機として二つの性格をもつ人間の労働が現われたのである。今までのところ労働だけが商品が商品で在ることを規定する外的な存在である。そこで、商品が商品で在るために、外的な存在である労働はいかなる条件を備えるべきなのか、という問題が検討されるのが第2節なのではないかと予想されるのである。そのような観点から第2節の内容をみることにしよう。

第2節 商品で表わされる労働の二重の性質

(2. Doppelcharakter der in den Waren dargestellten Arbeit)

前節において明らかにされたように、商品は使用価値であると同時に価値である。そのうち商品の価値をつくるという側面に限定して労働を観察すると、労働は使用価値をつくる労働という特徴を何らもたない労働として現われる。こうした商品に対象化されている労働がもつ二つの性格の区別は、マルクスによれば、彼自身が初めて明らかにし、また政治経済学を飛躍させたものであって、そこでこの点をさらにここで精査するのだという。それにあたっては1着の上着と10エレの亜麻布という二つの商品が説明のための例として取り上げられている。前節と同様に前者は後者の2倍の大きさの価値をもつと想定されている。すなわちそれぞれの価値の大きさは、10エレの亜麻布＝W とするなら、1着の上着＝2W である、という関係にある。

この節におけるマルクスの議論の展開は次のように整理することができよう。

A. 労働生産物が商品であるために有用労働がもつべき諸条件（商品の使用価値とそれをつくる有用労働が有する歴史的 성격）

① 使用価値は有用労働の有用性を表わしている。

有用労働はいつでも特殊な使用価値をつくる生産的活動である。この認識において有用労働はその Nutzeffekt 有用効果との関連において考察されている。たとえば上着は特殊な欲求を満足させる使用価値である。使用価値をつくり出すには特定種類の生産的な活動——目的、作業方式、対象、手段、及び成果により規定される——が必要である。生産的活動の有用性がその生産物の有用性によって、あるいは生産物が使用価値であることにより表現される労働、それが有用労働である。

② ある使用価値が商品であるための有用労働の必要条件

②-1. 上着と亜麻布とは質的に異なる使用価値である。それらの使用価値としての定在を媒介している裁縫と織布という労働も質的に異なる有用労働である。諸使用価値が質的に異なり、またそれをつくる諸労働が質的に異なっているから、ある使用価値は別な使用価値と、すなわち上着と亜麻布とが交換されるのである。

②-2. さまざまな種類からなる使用価値または諸商品体の総体には、その属、種、亜種、変種により区別されるそれぞれ特殊な有用労働の総体——eine gesellschaftliche Teilung der Arbeit 労働の社会的分割が現われている。社会的な労働分割は商品生産の十分条件ではないが、必要条件ではある。労働が社会的に分割されていた古代インド社会では諸生産物が商品として交換されることはなかったし、また労働が系統的に分割されている現代のどの工場でも生産が諸商品の交換により媒介されることもない。つまり諸生産物が商品として向かい合うには、それらが自立的で互いに独立している私的な諸労働の生産物であることが必要条件

（9）いわゆる「社会的分業」体制。

である。

③ 上着をその縫い手が自ら着ようがその客が着ようが、上着が特殊な使用価値であることに、すなわちその機能に変化はない。また上着をつくる裁縫は、それが社会的な労働分割の体制の一分肢であろうとなかろうと、そのことによって上着とそれをつくる有用労働である裁縫との関係が変化するわけでもない。上着、亜麻布という自然物ではない素材としての定在は、常に、特定の目的をもっておこなわれる生産的行為——有用労働に媒介されて存在している。つまり「諸使用価値の形成者すなわち有用労働としては、労働は社会のあらゆる形態から独立した人間の存在条件、人と自然との間の素材転換すなわち人間の生活を媒介する ewige Notwendigkeit 永遠に自然な必然事である。」

④ 使用価値である商品体は自然素材と労働という二つの Element 要素からなる結合物である。全ての使用価値からそれに注ぎ込まれているあらゆる有用労働を取り除くと、その後には自然素材という基体 Substrat が残る。すなわち人が生産においてできることは、自然素材の諸形態を変えることだけである。さらに人は労働において常に自然力に支えられてもいる。つまり「労働だけが諸使用価値すなわち富の素材の源泉なのではない。ウィリアム・ペティが言ったように、労働がその父であり、大地がその母なのである。」

B. 商品価値で表現される労働の諸内容

(本節の冒頭部で提示された想定——1 着の上着の価値は 10 エレの亜麻布のその 2 倍、したがって 1 着の上着の価値は 20 エレの亜麻布の価値に等しい——への注意が喚起されている。この想定が両者間の価値量の差異あるいは異同を表わしているからだけではなくて、上着と亜麻布の価値としての同質性をも表わしているからである。なお価値としての諸商品の同質性を生み出す労働の性格が規定されている最初のパラグラフの文脈はややつかみにくい。少し言葉を付け加えている。以下この部分の話の道筋を辿ることにしよう。)

① 諸商品の価値性格が表わす諸商品の同質性とそれをつくる諸労働の同質性

と異質性

①-1. 諸商品の価値性格という同質性とそれをつくる諸労働の異質性

(はじめに上記の想定が含む二つの内容, すなわち諸商品の価値としての同質性とそれらをつくる労働の質的差異が確認されている。)

「上着と亜麻布は諸価値としては同じ実体 Substanz からなる諸物 Dingen, すなわち同一種類の労働の対象的な諸表現である。だが, 裁縫と織布は質的には異なった諸労働である。」

①-2. 諸商品を生産する諸労働がもつ社会的総労働を構成する「同じ人間労働」としての同質性

これらの労働が同じ人によっておこなわれている社会, すなわち二つの労働が同じ人の労働の諸変形 Modifikationen であるという社会もあれば, 資本家的社会でのように一定割合の人間労働が労働需要の変化に応じて, それぞれ裁縫労働, 織布労働に配分替えされるという社会もある。(そのことが示しているように, 資本家的社会において裁縫や織布はそれぞれ社会的総労働の一部であり, その意味で同じ人間労働である。——筆者)

② 「同じ人間労働」の諸内容

②-1. 「同じ人間労働」は「ただの人間労働の支出」である

裁縫と織布とはそれぞれ特殊な目的をもっておこなわれる異質な生産行為である。この性格をそれらの労働から剥ぎ取った後これらの労働に残っているのは「menschliche Arbeit schlechthin ただの人間労働の支出」, 「人間の脳, 筋肉, 神経, 手などがもつ力の生産的消費」という共通の性格だけである。この共通する性格に注目すると, 裁縫や織布は同じ「人間労働力を支出する二つの異なる形態」にすぎないことが明らかとなる。つまり諸商品の価値が表わしているのは, この意味での「ただの人間の労働」あるいは「人間労働一般」がそれらに支出されているという事実だけなのである。

②-2. 「ただの人間労働」は「単純な平均労働」または「単純労働」である。

また「複雑な労働」は「単純労働」に還元される。

この労働は「特別にそれを開発したわけでもないのに、大人ならば誰でもその肉体という機関のうちに平均的にもっている」能力の支出、その意味で単純な平均労働力である。その性格は国によりまた文化の発展段階の違いにより変わるのであるが、一つの社会ではこれが単純な平均労働力だ、と指し示せる労働が現実存在する。それに対して複雑な労働は——ブルジョワ社会では将軍や銀行家が大きな役柄を演じ、ただの人間はひどくみすばらしい役柄を演じているように——「強められた」あるいは「何倍かの」単純な平均労働として加えられるのである。複雑労働による商品の価値は当該の商品の一定量がある量の単純労働により生産される商品と等置される交換関係において表示される。そして商品の交換関係という社会的回路を経て、複雑労働は単純労働に還元されるのである。すなわちさまざまな複雑労働の単純な平均労働への多様な還元率は生産者たちの背後の社会的過程（＝商品の交換関係——筆者）を媒介に固定されているのである。以下では議論の単純化のために、無条件に全ての労働を単純な労働力とみなすことにする。

②-3. Bのまとめ：諸商品価値で表わされる諸労働はその有用な諸形態を剥ぎ取られた諸労働である。諸労働が諸商品の諸価値の実体であるのは、それらが労働対象に対する諸生産行為として諸使用価値に結合している要素・有用労働であるからではなくて、単に人間労働力の諸支出であるからである。

上着と亜麻布の価値においてはそれらの諸使用価値の相違が剥ぎ取られているのと同様に、諸商品の諸価値としてその性格が表現されている諸労働では、それらの有用な諸形態すなわち裁縫と織布との相違は剥ぎ取られている。上着と亜麻布の諸価値に含まれる諸労働は、それらが裁縫と織布であるということ、すなわちそれぞれ生地と布とを対象とする生産諸行為であるから諸価値がそれらを含んでいる諸労働として認められるのではなくて、単なる人間労働力の支出であるからそのようなものと認められるのである。つまり、「使用価値である上着及び亜麻布の Bindungselemente 結合元素であるのは質的に異なる裁縫と織布

である；裁縫と織布は、上着及び亜麻布の特殊な質が剥ぎ取られているかぎり
で、そしてそれら両者がともに人間の労働という同じ質を有しているかぎり
で上着価値と亜麻布価値の実体なのである。」

C 労働の生産力と商品の使用価値量及び価値量との関連

① 上着と亜麻布は単に価値であるだけでなくそれぞれ量の定まった価値、す
なわち価値量でもある。当初の想定では、1 着の上着の価値は 10 エレの亜麻布
のその 2 倍である。両者の価値量の差異はそれぞれに支出されている労働力
の量の差異によるものである。

② 商品に含まれている労働は、使用価値との関連では質的な労働と認められ
たが、価値量との関連では、量的な労働と認められる。そのことにより商品に含
まれている労働は、特定の質をもたない人間労働に還元されるのである。労働
は商品の使用価値との関連では、どのように、またいかなる種類の労働として
おこなわれるのかが問題となるが、価値量との関連ではどれだけの労働すなわ
ち労働の継続時間が問われることになる。

③-1. 労働の生産力が不変でも商品の価値量が増大する場合がある。たとえば 1
着の上着の生産に必要な諸有用労働に変化がなくても、(生産される使用価値量
が増大すなわち支出される労働力の量が増大し、またそれに比例して上着の使
用価値量が増大する結果——筆者) 諸上着の価値量が増大するという場合があ
る。それに対して 1 着の上着の生産に必要な労働が倍増する結果 1 着の上着の
価値が以前の 2 着の価値量と同じになるという場合もあれば、1 着の上着の生産
に要する労働が半減して 2 着の上着の価値は以前の 1 着の価値と同じになる
という場合もある。いずれの場合にも 1 着の上着がもつ機能、及びそれが含む諸
有用労働の質は同じままであるが、1 着の上着に支出される労働量は変化してい
る。

③-2. 生産力の変化にともなって素材的富＝使用価値の量的増大がその価値量
の減少と同時に発生することがある。この使用価値量と価値量との相反する変

化は二つの本質（有用労働と抽象的人間労働）からなる労働の性格に由来する。

本来、生産力は具体的有用労働の生産力であり、実際には特定の目的をもっておこなわれる生産活動の時間当たり作用度を意味する。したがって有用労働はその生産力の増減に応じて、より豊かな生産物の源にもより僅かな生産物の源にもなる。しかし、生産力の変化は価値で表わされる労働とは何の関わりももたない。本来、生産力は有用労働に帰属する。だから労働の有用性が捨象されると、当然、生産力も労働とは関わりを持たなくなる。したがってある一つの同じ労働は、価値で表わされる労働としては、たとえ生産力が変化しても同一時間内には同一の価値量を産み出す。つまり使用価値量を増大させる生産力の変化は、それらの一定量の生産に必要な労働時間の総量を短くする場合には、増大した（使用価値）総量の価値量を減少させるのである。

D. 第2節の総括

「Alle Arbeit すべての労働は、一面では、生理学的な意味における人間労働力の支出であり、また同じ人間のあるいは *abstrakt menschliche Arbeit* 抽象的な人間労働という属性において諸商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、目的の定まった形態での人間の労働力の支出であり、またすべての労働はこの具体的な有用労働という属性において、使用価値を生産するのである。」(S. 61.)

以上が第2節の詳細な文脈である。みられるようにAにおいて考察されているのは、労働生産物である使用価値及びそれを生産する有用労働がいかなる性格を備える場合に労働生産物は商品で在るのか、という問題である。すなわち労働生産物が商品であるための必要条件を商品自身にとっては外的存在である労働がそのためにもつべき条件として明らかにするために、商品の使用価値及びそれをつくる有用労働、及びそれらの関係が分析されているのである。これによってマルクスが得た結論は、個々の使用価値が他人のための使用価値として生産され、したがって個々の有用労働が他人のための諸使用価値を生産し、そ

してそれらの有用労働がそれぞれ社会的分業体制の一分枝を構成しながら私的諸労働としておこなわれる場合にのみ労働生産物は商品となる、したがって価値性格をもつのだ、というものである。

また A において商品に含まれている労働の有用性が商品の有用性すなわち使用価値の内容を規定すること、また有用労働は資本家的生産様式が支配的におこなわれている社会の物質的生産のみならず諸々の生産様式の支配する諸人間社会の物質的生産が実現されるための必要条件をなしていることも明らかにされている。こうして資本的生産様式が支配的におこなわれている社会における富の「本質的形態」である商品はあらゆる人間社会において労働生産物が有する自然な、永久的な形態などではなく、他人のための使用価値として生産され、そしてそれをつくる有用労働が特定の諸性格（商品の使用価値の内容を規定する有用労働、他人のための使用価値をつくる有用労働、社会的総労働の一分枝をなす有用労働、社会的労働分割の諸部分をなす有用労働、社会的分業体制の一環をなす有用労働、私的に実現される有用労働）を有する限りで労働生産物は商品であることが明らかにされているのである。

A では商品をつくる労働の歴史的な性格が確定された。それを承けて次に B では「商品で表現される労働」を使用価値で表現される労働・有用労働と対をなして構成する「商品価値で表現される労働」という歴史的な性格の諸内容が規定されている。すなわち、第 1 節の商品の二属性の規定において述語として現われた二性質から構成される商品生産労働のうち、「商品価値の実体をなす労働」という概念が歴史的に再規定されているのである。また C では商品で表現される労働の生産力の変化と商品の使用価値量及び価値量との関係を分析することによって「労働生産力」が具体的有用労働の生産力、すなわち「特定の目的をもってなされる生産活動の時間当たり作用度」を表わす概念として定義されている。

なお第 1 節との関係という観点から第 2 節の諸内容を観察すると、第 1 節においては an sich に捉えられた商品が分析されたのに対して、第 2 節では労働と

の関係において für sich に捉えられた商品が分析され、それによって商品とそれをつくる労働の「歴史的」性格が定義されているものと考えることができよう。とすれば、続く第3節では商品とそれをつくる労働の an und für sich が論じられているものと予想される。(次号に続く)